

資料 1

平成15年度独立行政法人国立特殊教育総合研究所知的障害教育研究部一般研究
「知的障害のある児童生徒の担任教師と関係者との協力関係推進に関する研究―個別の指導計画の作成に焦点をあてて―」研究報告書より転載

情報の共有・分析ーインシデント・プロセス法による事例研究

竹林地 毅

(知的障害教育研究部重度知的障害教育研究室)

1. インシデント・プロセス法について

インシデント・プロセス法とは、マサチューセッツ工科大学(MIT)のピコズ教授夫妻により考案された事例研究法の一つである。

事例として実際に起こった出来事(インシデント)をもとに、参加者は出来事の背景にある事実を収集しながら、問題解決の方策を考えていく。

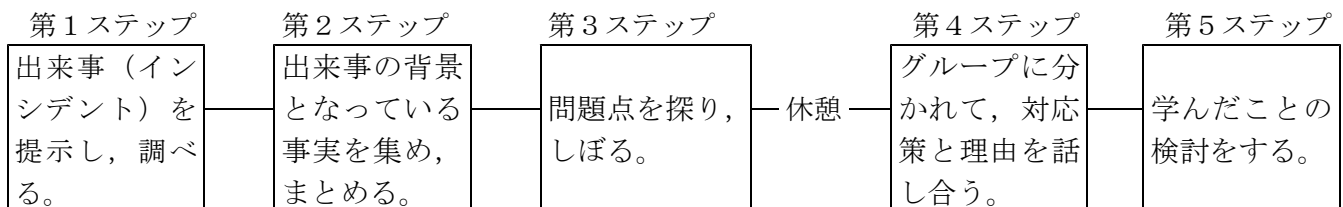
事例研究法は、一般にケーススタディとも言われ、実際の場面で起こる問題を事例として提起・提案し、参加者が問題解決策を考える。その過程で、参加者の分析力、判断力、問題解決

能力、職務遂行能力を養うことになる。

インシデント・プロセス法では、参加者それぞれが事例について考え、自分が実行しなければならないことに気づき、実行できるようになることを目指している。つまり、参加者に問題解決過程の共有化と理解が促されやすいといわれている。

2. インシデント・プロセス法の手順

インシデント・プロセス法による事例研究の手順は、次の図のようになる。



第1ステップ：インシデントを提示し、調べる。

○発表者

自分の仕事における問題で解決に苦労した実例を選び、その中で起こった出来事（インシデント）で解決に苦労した実例を具体的に提示する。

○司会者

参加者全員がその場面を具体的にイメージできるように質問をする。

第2ステップ：出来事の背景となっている事実を集め、まとめる。

○司会者

参加者に次の留意点を説明する。

- ・簡潔に、具体的に質問をする
- ・質問を独占しない
- ・他の参加者と協力して関連した質問をする

・重複した質問はさける

・発表者の推測、感想、意見を求めない

・質問者が偏らないようにする

・回答中に割り込んで質問をしないようコントロールする

・質問内容の分散や偏りを是正する

・必要があれば質問されていないことに気づくよう促したり、発表者に補足を求める

○参加者

発表者に質問し、解決に関係があると思われる事実を集める。

司会者の説明した留意点に注意し、自分なりに出来事の全体像を組立ながら質問するが、今後の対応は質問しない。

○発表者

事実を簡潔に回答する。

- ・質問からそれたことは回答しない
- ・推測、意見は原則として言わない
- ・推測を答える場合、その根拠となる事実や理由を簡潔に説明する
- ・今後の対応は言わない

第3ステップ：問題点を探り、しぼる。

○司会者

問題点を自由に話し合ってもらおう。次に、今後の対応について参加者に「具体案」を書いてもらう。

具体案：自分ならこうするという具体的な内容

理由：そうする理由、根拠

具体案を回収し、休憩する。休憩中に内容を分類する。

○参加者

出来事と集めた事実を総合する。自分なりの事例の全体像を明確にする。問題点を一つにしぼり、自分の意見を言う。

自分なりの「具体案」を書く。

○発表者

参加者が出した問題点と自分が考えている問題点を比較検討する。

第4ステップ：グループに分かれて対応策と理由を話し合う

○司会者

分類した内容を提示し、参加者をグループ分けし、リーダーを決めて自由に問題点を話し合ってもらおう。

- ・グループごとに「具体案」を決め、内容と理由を話し合う
- ・発表者に実際の対応とその後の経過を発表してもらう

○参加者

グループのリーダーを決め、「具体案」について話し合い、グループとしての内容と理由を固める。グループごとに内容と理由を発表する。

○発表者

参加者が考えた対応と自分の実際の対応を比較検討する。グループに入るが自分がとった実際の対応は話さない。最後に、実際の対応とその後の経過を発表する。

第5ステップ：学んだことの検討をする

○司会者

参加者に何を学んだかを問う。何を学んだかの話し合いに時間をかけるようにする。発表者に補足や感想を問う。

○参加者

全体を振り返って、この事例と参加者相互から何を教訓として学んだかを話す。

○発表者

言い残したことや事例研究の経過について感想を述べる。

3. インシデント・プロセス法による事例研究のメリット

- (1) 発表者の用意する資料が少なく済むので負担が少ない。
- (2) 参加者一人一人が当事者の立場で考えられ、主体的、積極的な討論ができる。
- (3) 実際の出来事をもとに、参加者が共通の体験を深めながら検討できる。
- (4) 事例の事実について質疑応答がなされるので、発表者の対応について批判的になりにくい。

4. 個別の指導計画の作成での期待される効果

インシデント・プロセス法による事例研究では、参加者に次のような効果が期待できる。

- (1) 実際に起こる問題を解決するための判断力や問題解決力を養うことができる。
 - (2) 情報の収集や分析の重要性を理解できる。
 - (3) 討議の過程を通じて、参加者が互いの意見を傾聴し、話し合い、共に考えることの重要性が理解できる。
- 従って、個別の指導計画の作成にかかわる担任教師や関係者等がインシデント・プロセス法により事例研究をすることで、次のような効果が期待できる。
- (1) 個別の指導計画の作成のために必要な情報のとらえ方や収集・分析の考え方(=実践的な判断力)を学び、高め合うことができる。
 - (2) 指導方針や指導目標・方法の決定のプロセス(=会議)の重要性を理解できる。
 - (3) 柔軟で実践的な指導方法を創造する力を養うことができる。
 - (4) 参加者が互いの意見を傾聴し、話し合い、共に考えることの重要性が理解でき、実践的な協力関係を構築できる。

参考文献

- 1) 教育技法研究会編 教育訓練法 経営書院 1989

2 インシデント・プロセス法を応用した事例研究

(1) 研究協議の記録

その①～平成13年度 短期研修 研究協議③の記録

1 ○○先生からのインシデント・プロセス

3年生K君。字を書けるので作文指導を行った。パターンの決まったものは書けるようになったが、パターン以外は意味の分からないものになった。

2 具体的にイメージができるようにするための質問と回答

	Q 質問	A 解答
授業場面	・授業のきっかけは。 ・作文のテーマは。 ・パターンは。 ・学習時の子どもの人数は。 ・座席の形態は。	・字が書けるので、言葉や文を使わせたいと考えて。 ・学期を通して、「今日、僕は、何をどうした。」その日の中の出来事、印象的なことを書いている。 ・「いつ・だれが・何を・どうした」で書いている。 例)「きょう、ぼくはサッカーをしました。」 ・1対1の個別指導の時もあれば、6人全員で学習することもある。 ・学習時の基本的な形は、黒板の方を向いて「コ」の字に座っている。
K君について	・学年性別は。 ・障害の様子は。 ・どんな子ども。(長所) ・現在の大きな課題は。 ・字を書けますか。 ・何文字書けるか。 ・話す力は。 ・教室での態度は。	・3年生、男子。 ・知的障害でダウン症候群。 ・明るい活動的な子ども。 ・おしっこの失敗を減らすことを目当てにして取り組んでいる。 ・ひらがな、カタカナ、漢字も書けるものがある。 ・4文字になると、音が変わったり抜け落ちたりすることもある。 ・文を書くとき、句点が入っている。長い文を書くときには、読点を書くこともある。 ・「サッカーする」「おかわり、いい」など2語文がほとんどだが、音読はできる。絵本を喜んで読んでいるような表情のときもある。 ・与えられた課題は、集中して最後までやることが多い。課題が終わると、周りの子どもを見ながら、続けて書いていることもある。
教師の状況	・これまでの支援は。 ・K君をどう捉えているか。	・単語の学習をしてきた。カルタ遊びやプリント、文字カードを使って3文字から5文字の練習をしている。また、宿題に日記を出している。家の人一緒にと書いてくることが多い。母親が一緒の場合は、話がふくらんでいるが、一人の場合は、いつもと同じ羅列になっている。 ・書くことを嫌がり、しようとはしないということはない。友達の文を見たり、聞いたりしている。

3 問題点

- ・パターンで書いているので、書く必要性を感じていないのではないか。
- ・書く活動と楽しい活動が結びついていたのか。
- ・語彙の不足や文字数の多い言葉を書くことに慣れていなくて、うまく表現できないのではないか。

4 具体案

- ・書くことの意味、必要感を感じさせるため、朝の会で昨日のことを書くようにするとよい。
- ・文を本人が読み、教師も書いてあるままを読む。よいところをほめつつ、自分の文のおかしいことに気づかせる。
- ・聴覚記憶力が低いのは、ダウン症の特徴。記憶力を育てる手だてや取り組み、配慮も必要。
- ・日々の生活の中で、「なぜ」「どうして」という言葉掛けをしていけば、自分の気持ちを伝えようとするのではないか。その言葉をテープで録音して、教師が文字として提示する。
- ・児童が喜ぶ活動をたっぷりさせる。(サッカー、ゲーム、料理など)その後、教師と話す仲間として、楽しかったことをお話しする。その中のキーワードを教師が書き出しておいて、言葉に出させたり視写させたりする。記憶を補うために、ビデオや写真を活用するとよい。
- ・2～4文字の言葉の学習が必要。覚えた言葉の整理とチェックも必要ではないか。
- ・書くことよりも話すこと、言えるようになることが先である。気持ちや様子を繰り返し、話していくことで語彙が増える。
- ・言葉の数を増やす必要がある。長い文字の言葉も学習する。
- ・K君の伝えたいことがあるかどうか、学校生活全体を見直す必要がある。
- ・話す活動を充実させるため、補い深めるような質問をする手立てがいる。
- ・文字を読み、読んだことを現実化するため動作化が必要。(劇、宅急便ごっこ、3つの指令ゲーム)
- ・文字を書いたら、人に伝える経験を積み重ねる。
- ・書くことは大切で、「筆談」をする。一行日記的に質問して、それに答えるようにする。
- ・表現意欲を高める工夫、手立てが必要である。また、表現したことと現実世界とのつながりが重要である。

5 授業事例

この授業で私が問題と感じたこと

○授業者の問題

- ・文字を書く必然性がないのに、文字を教えられてきた。書くことは、話すことと同じように人に伝えることを分からせないと必然性が生まれてこない。
- ・児童の実態の捉え方が十分ではなかったのではないか。書くことが楽しいのか、人が喜ぶから書くのか、よく見極めることが大切。

○授業後の取り組み

- ・聞いて理解するために。
生活単元学習や日常生活の指導を通して、聞く活動に重点を置いている。
 - ・テレビ視聴 ・電話 ・カルタ取り
- ・読んで理解するために。
書く活動を必ず読み返しながら取り組む。
 - ・プリント ・50音カード ・読書 ・メール
 - ・作文や日記(いつ・だれが・なにを・どうした)

6 今回学んだことと感想

学習を有効なものにするためには、児童の実態を把握しておく必要がある。指導内容をいろいろ工夫しても、児童が書く必然性を感じなければ意味がない。話すことと同じように、書くことで自分の思いが伝わることを分かたり、人が喜ぶから書くのではなく、書くことで楽しさや満足感を味わうことを大切にしたい。

その②～平成13年度 短期研修 研究協議④の記録

1 ○○先生からのインシデント・プロセス

6年生T君と足し算の勉強をした。1から9まで順序よく並んだ式の計算や暗算は素早く解答するが、ランダムに並べた式の計算や10以上の数の足し算は、時間がかかり集中力がなくなった。

2 具体的にイメージできるようにするための質問と解答

授業場面	・順序よく並んだ式やランダムに並べた式の計算とは。 ・この授業は1対1か。 ・いつ、どこでやっているのか。	・順序よくは$1+1=2$、$1+2=3$という順にノートに書いていく事。ランダムは自由に行う計算の事。 ・はい。 ・朝の活動の中。最後の15分位。
T君の算数の実態	・算数は好きか。 ・具対物を数えようとするか。 ・数唱はいくつまでできるか。 ・目の前の物の数がすぐわかるか。 ・指を使って数えるか。 ・量の多少は理解しているか。 ・数字で大きさ比べはできるか。 ・10以上の足し算はできないか。	・きらい。 ・指示すれば数える。自分から好んでは数えない。 ・600までは確認している。 ・10以下くらいなら一瞬でいくつかわかる。 ・10以上になると指差ししながら数える。 ・理解している。 ・数字だけではやったことがない。 ・数えればできるが、計算式だけだとできない。
その他のT君について	・暗算はできるのか。 ・曜日や月日は理解できているか。 ・金銭の理解はどうか。 ・時計は読めるか。 ・暗記力はよいほうか。 ・足し算をやった意図は。 ・好きな教科は何か。 ・1学期の学習内容は。 ・特殊学級の子どもと教師の数は。 ・現在は。(養護学校) ・一番問題だと感じた行動は。 ・それに対してどう対処したか。 ・好きな食べ物は。 ・好きなことは何か。 ・何故わかったか。 ・遊ぶことは好きか。 ・友だちと関わることは。 ・絵を書くことは好きか。 ・その作品を書いて満足したか。 ・今、先生の指示には従えるか。 ・今は集中できなくなると。	・10までは、できる。 ・理解できるようになった。 ・買い物は好き。金銭の意味理解はもう少し。 ・時計の針の形で時刻を覚えている。 ・よい。 ・「足し算」ができるという、申し送りを確認するため。 ・机に座る学習は嫌い。 ・5年生まで特殊学級に在籍。手におえず6年生で転入。転入時は着席できず、教科学習はしていない。 ・三人の子どもに担任一人。 ・五人の子どもに担任三人。 ・危険が分からず、さっと行動する。 ・まず、信頼関係作り。ダメなことはダメとし、約束を守ることできるように一緒に活動した。 ・チーズ。 ・本を読むこと。 ・母親の話。図書室にいていれば落ち着いている。 ・好き。 ・好きではない。 ・好き。思いのまま描いた作品が特選になった。 ・非常に満足していた。 ・担任の指示はしっかり聞けるようになった。 ・立とうとするが我慢している様子が見られる

3 問題点

- ・くりかえしの計算練習の体験は、苦痛な作業になっていたのではないか。
- ・彼にとって算数を学習する必然性がうまれていないのではないか。
- ・日常生活の中で「数」を学ぶことが生活の喜びにつながっていないのではないか。
- ・集合数の理解の範囲と順序数の理解の範囲に差がある。

4 具体案

- ・担任と落ち着いて課題学習ができるようになったことは、大きな成果。この時間は大切に使う。具体的な量と数字が結びつく教材教具の工夫。(パズルやさいころゲーム・指遊びなど)
- ・他の時間の中で、彼が数について考える必然性のある楽しい状況を設定する。(みんなでゲームをやって得点係を任せるなど。)
- ・お勉強としての数字や計算と生活の中の数や量がまだ結び付けられていない様子。一日の生活の中で意図的に数や形を意識できるような働きかけをする。
- ・彼の得意な本読みなどの力を伸ばす。パソコンソフトなどを使った学習をしてはどうか。
- ・数を「必要なもの」として捉えられるように、図書室にいて彼の好きな本を数えたり、本屋さんに本を買に行ったりするなどの活動が必要ではないか。
- ・保護者と一緒に彼の実生活での数的処理を捉え直していくことが必要ではないか。計算というのは、答えが本当にあっているか自分では実感できない。もっと、「これで合っている。正しい。」と実感として味わえるような学習内容が必要になるのではないか。
- ・1対1の個別指導も大切だが、集団の中でその子の力が認められ、自信につながるような場面設定も大切ではないか。

5 授業事例

数を学ぶことを楽しめ、生活の中で使える力にするために実際に行ったこと。

「調理に必要な材料を買おう」

- ①お店屋さんに行く。必要な品物の値段を覚えてくる。
- ②教室で値段を確認する。模型を使ってお金の学習をする。
- ③この前覚えた値段の品物と同じ物を買ってくる。
- ④朝の時間には確認としてプリントによる計算も続けた。

T君の様子：プリントの計算 $200 + 30 =$ の計算に 230 えんと書くようになった。

「お年玉で好きなものを買おう」

- ①最初は好きな物を買ってくる。
- ②次は値段を調べてきて計画的に買う。

最初はわざと足りない金額をもたせ、『買えない』という体験から、値段と金額があっているか、自分で判断する力を育てていく。

T君の様子：よく考えてお金を確認し買い物に喜んでいけるようになった。

6 今回学んだことと感想

- ・系統的な教科の積みあげも大切だとは思いますが、訓練では何の意味もない。やはり生きていくため知恵を育てるような学習が必要。
- ・現実度の高い学習を設定しその中で「うまくいかないな」という場面もつくり、「どうしたらいいのかな」と子どもが考えることが、次につながる力なのではないか。
- ・将来どう生きていってほしいかということを常に考えていくことが大切。

子ども一人と、人間としてきちんと向き合うことの大切さを改めて教えられた。まずは信頼関係を築く努力をし、その子に今「何を学ばせなければならないか」ではなく、その子が今「何を必要としているのか」をきちんと見抜くこと。そして、子どもたちが、その学習を「やりたい。」思い、やったことが生活の中で生かされるような授業を工夫していくことがものすごく大切なことだと感じた。

その③～平成13年度 短期研修 研究協議⑤の記録

1 ○○先生からのインシデント・プロセス

3年生のK君。生活単元の授業「菓子屋横丁へ行こう。」のまとめの時間。買ったお菓子の話や、遊んだことの話は喜んでしていたのに、「みんなにわかるように、新聞にしてまとめよう」といって、写真と原稿用紙をわたすと、固まってしまう、声かけをしても書こうとせず、そのうちに原稿用紙を破り始めてしまった。

2 具体的にイメージができるようにするための質問と回答

	Q. 質問	A. 解答
授業場面	・この日の授業をした場所は。 ・時間帯は。 ・生徒数と、担当の教師は。 ・授業形態は。 ・指導方法は。	・教室です。3時間目から、4時間目にかけて。 ・児童が12人、教師2人、介助の先生1人。 ・全員でした。この単元の1日の流れを文字板で示し、教師が選んだ写真を見せながら個人がしたことを発表し、新聞を作るための原稿を書く。
K君について	・活動の様子は。 ・文章を書く活動は好きですか。 ・好きなこと。 ・嫌いなこと。苦手なこと。 ・友達は。	・喋るのは苦手で、不明瞭。その日はよく話していた。書く活動に入って15分後にプリントを破り始め、机を蹴って廊下に出ていった。嫌がる所を見たのは今回が初めてだった。 ・1日の流れや、手順は憶えている。 ・自分から進んで書くことはない。ひらがなは書ける。漢字には興味がある。2年生で入級して来るまでは寝転がって、だだをこね書かなくてもいいとなっていた。入級後は落ち着いてきていた。 ・電車、プラレール、音楽に合わせて体を動かすこと。すごろくゲームなどが好き。 ・体育でもごねることがある。走れない、転んでしまう。体脂肪率48%・絵は描かない。 ・自分の気持ちに正直になれない。謝れない。 ・同じ学年のダウン症候群の女子。幼稚園の時は友達の輪に入って遊ぶことができなかった。
家庭環境	・家族構成は。様子。	・両親・姉3人・本人・妹2人。一つ上の姉が唯一の理解者で、良く話しをしている。母親やその他の姉妹とは話さない。父親が好き、トラックに乗せてもらったり、一人で会社に行ったりする。
教師の状況	・担任の事前準備は。	・担任2人は話し合いをして、分担をしていた。介助の先生にはその日に担当の子どものことを話してお願いをした。K君と出会って1ヶ月の状況での授業であった。もう1人の担任も入級する前の状況や、様子については同じである。

3 問題点

- ・この時点で子どもと、教師の関係はどの程度であったか。
- ・書く学習について、楽しい場面と書く活動が結びついていたのか。
- ・書きたい内容と、教師が考えていた書く内容にずれはなかったか。
- ・書くのが苦手という情報から原稿用紙は小さくされていたが、手だてとして適切であったか。

4 具体案

- ・生単のまとめとしての活動は、別の活動をした方がよかったのでは。
- ・転校（入級1ヶ月）して来た時点では、このようになることが予想するのはなかなか難しい。
- ・よく壁新聞にするが、一人一人が内容を発表できるのか考えるべきである。
- ・滑り台の写真があったら書けたかもしれない。
- ・思いを書くのが苦手だったとしたら、手本や聞いて書くなどした方がよかったと思う。
- ・言葉を教師が聞いて、手紙などで気持ちを書いては。
- ・体育でもごねるので、体脂肪率を減らす活動、音楽に合わせて動く活動を家と学校でする。
- ・学年の始まりなどは、次へつなげることを考えていくべき。子どもの実態をチェックする内容の授業を作る。
- ・一回の授業で、よく知ることは難しい。今回のことを反省して次の授業を話し合っていく。
- ・書くのがイヤだと表現しているが、なにがイヤなのだろう。書くことがイヤ、教師と話すのがイヤ？量が多いのがイヤなのではなくて、書くことがイヤなのだろう。
- ・K君の話を聞いて教師が書く。文字シールを貼って書く。読む活動をする。ワープロを使うのもいい。
- ・写真を撮るのは実際難しいが、楽しいところを撮っておかないといけない。
- ・この時点では目標設定を、子どもを知る、仲間作りに重点をおいて考えるべきであった。
- ・少ない情報の中ではあったが、書くことが嫌いなことが分かっていたなら、電車のように写真を並べて、ゆっくり見ながら教師が、写真の枠や台紙に実際にした。楽しい思い出を書いてやる方法でもよかったと思う。・ストレスになっているものを解消することが最優先課題だと思うので、太っていて動くのが苦手で、動かなくてもいいとされていたことを改善する。話し言葉では、言い直しはさせずに分からなくても「そうなの。」と聞いて、コミュニケーションができているお姉さんと話すことでその子の考えを聞き出すこともできる。
- ・子どもの気持ちを考えずに、教師主導で行うまとめの学習はしないようにしたい。

5 授業事例

この授業で私が問題と感じたこと

①授業者の問題

- ・話し言葉では楽しく表現していたのに、それを十分認めないうちに、彼が最も「苦手だ」と感じている課題に配慮なく、向かい合わせてしまった。
- ・この時点で自分がどう彼に向かい合うべきか迷ってしまい、はっきりとした態度がとれなかった。
- ・彼の気持ちがまだ読み取れなかった。

②K君の問題

- ・彼が表現したい写真の場面を選べなかったという悔しさを、まだ言葉で表現できない。
- ・少しがんばれば書けることでも、今までごねれば書かずに済むという経験をしてきてしまったためになんとか逃げようとしてしまう。
- ・やればできるという経験が少ない。

授業後にとりくんだこと

①自分に負けない体力作り→信頼関係づくり

- ・持久走 ・登山 ・ろくぼくのぼり ・リングうんてい

②字を書くことに自信をもたせる国語の授業

- ・ポケモンのうたでカタカナ学習 ・プラレールカルタ ・2文字からの言葉集め
- ・朝の会ノート

③彼が表現したい気持ちを感じて言葉にすること。→信頼関係づくり

6 今回学んだことと感想

授業を一人一人に最もよい形で達成するには、教えたい内容を考える前に、児童が何を学びたいと思っているかを考える必要がある。さらに、今回の授業では、授業を実施した時期が教師にも児童にも不適切であった。児童と教師の関係づくりが不十分な状態では、事前の準備や手だてがあっても授業としてはなりたない。児童の自発的・自主的活動を望むなら児童をよく知り、教師との関係が構築されていなければならない。

その④～平成13年度 短期研修 研究協議⑥の記録

1 ○○先生からのインシデント

4年生T君。生活指導の先生から呼び出され、隣接小学校の子どもとの関係と、遊びの内容について聞かれ、「○○君は吸ったけど、自分はたばこを吸っていない。」と答えた。次の日から、学校に出て来なくなった。

2 具体的にイメージできるようにするための質問と回答

たばこを吸ったことについて	・ T君は。 ・ たばこはどこで吸ったのか。 ・ 誰と吸ったのか。 ・ T君と隣接校の子との関係は。 ・ 吸ったという情報はどこからか。 ・ 最初に話を聞いたのは。 ・ そのときのT君の様子は。 ・ 過去に吸ったことはあるか。 ・ 生活指導の先生は。 ・ 話をしたのはいつか。 ・ T君と生活指導担当との関係は。 ・ たばこは誰のもの。 ・ 火はどうしたのか。 ・ T君は本当に吸ったのか。	・ 特殊学級の子ども。4年生になってからの入級である。てんかん。 ・ 自宅前の広場。 ・ 隣接校の子どもと本学級のY君など計5名。 ・ 家が近くである。幼稚園等が一緒だったのかもしれない。 ・ その場にいた子が隣接校の教師に伝え、その情報が本校に入った。 ・ 担任。 ・ 自分のことは言わない。友だちが吸ったことは言う。 ・ ないと考える。(T君の会話の中にサインはあったかも・・・) ・ 6年担当の女性の先生。穏やかな話し方で尋ねたようだ。後から担任も加わり、T君と3人で話した。 ・ このときは放課後。 ・ 授業などでの接点はない。 ・ 隣接校の子どものもの。 ・ ライターを使っている。誰のものかは分からない。 ・ T君は吸っていると考え。見ていた子や吸った子の話を聞く中で、T君の話だけが合わない。
T君の学校生活	・ T君が好きなことは。 ・ T君は誰と遊ぶのか。 ・ 遊びの内容は。 ・ 交流学級の子どもとは。 ・ 特殊学級の子どもとの仲は。 ・ 現在の学習の内容は。 ・ T君が夢中になった特殊学級の学習は？ ・ T君は教科の学習は好きか。 ・ T君と他の先生たちとの関係は。	・ つり。学校でもよく外で遊んでいる。 ・ 学校では交流学級の子。 ・ サッカー、ソフトボール、キックベースなど。 ・ 仲はいいようだ。 ・ 5年生のY君と遊ぶことはある。運動面ではT君よりY君が上である。Oさんも一緒に3人で仲良く遊ぶこともある。 ・ 教科学習が中心。小学3年生程度の内容。理科、社会、体育など交流学級で学習している。 ・ 「紙すき」。ごみの学習からはじまり、リサイクル、牛乳パック集めと展開した。 ・ 嫌いなようである。 ・ 職員室にはよく来て話をしている。
家庭環境	・ 家庭は。 ・ T君の帰宅時に家にいるのは？ ・ たばこを吸ったとき祖母はいたか。 ・ この問題の家庭への連絡は。 ・ 父親は。	・ 父親、祖父母、弟、T君で暮らしている。母親は離別。 ・ 祖母である。世話は祖母がしている。父親は帰宅が遅いようだ。 ・ いなかった。 ・ 家庭に連絡した。 ・ 帰宅は午後8時か9時である。子育ては祖母任せ。

3 問題点

- ・ 先生からの指摘でショックを受けているのではないか。T君の気持ちを考えたい。
- ・ この場面での対応、学校生活を含む事前の対応、たばこの問題そのときの対応、休み始めてからの対応のどこに焦点を当てるのか。
- ・ 正直に言えなかったことが問題である。言えるようにするにはどうすればよいのか。
- ・ 事前に話が出たとき、教師側のアンテナはどうだったのか。
- ・ 指導に入るときの担任と生活指導担当との連携はどうであったか。
- ・ 事前の問題や学校を休むことへの対応も含めて考えて、T君にとって楽しい学校生活づくりをどう進めるか。

4 具体案

- ・ 元気な男の子である。自分のことを周りはどう見ているのか、言葉には出さないがいろいろと考えている。自分自身の学習面の遅れを感じ取っているのであろう。学校の活動の中でも自信を持てるようにすべきだ。生活の中でT君が好きなことや得意なことを他の人に見せる機会があってもいいのではないか。
- ・ いわゆる境界線の子どもであろう。話をするときもどこまで理解できるかなど考えることが大事。担任の先生とT君との関係づくりも大事である。担任と子どもとの関係が深まれば話す内容も変わるし、何でも話せる関係ができるのではないか。
- ・ 軽度の子どもたちは想像以上に劣等感を感じているのではないか。自分は自分のままでいい。そのことを学級の中で支えていきたい。そのためにも日頃から子どもと付き合い、子どもの良さを知っておくことが大事であろう。
- ・ T君はたばこを吸わざるを得ない状況にあったのかもしれない。悪いということは分かっているはず。T君には自信を持たせたい。T君を先生にして通常学級の子どもたちに教える。尊敬のまなざしを受けることの気持ち良さを味わわせたい。T君が校内の先生方に特殊学級で学んだことを教える方法もある。
- ・ T君に「先生はT君が好きなんだよ、T君を大事に思っているんだよ。」ということを伝えたい。

5 実際に行った授業・対応

生活指導担当が話をしても、T君は他人事のように話すことを続けた。担任としてはT君はたばこを吸ったと考えている。自宅前のたばこを吸ったと考えられる場所でも子どもたちと共に確認をした。T君には本当のことを言うことが大事であるということは伝えた。

T君が学校を休み始めてからは、手紙や電話で連絡をとるようにした。教師が家庭を訪問すると逃げ出すような様子を見せていたT君も祖母や友だちの協力によって、保健室登校を始めるようになり、10月には教室に戻ってきた。

家庭環境が良いとは言えないT君を支え、学校生活を楽しく送ることができるようにしていきたいと考えている。

6 今回学んだことと感想

- ・ 問題点を考える時に、どの場面に焦点を当てて考えるかを確認してから話し合いを始めることが必要だということを知った。(今回の場合、事前の対応か、その時の対応か、休み始めてからの対応か。)
- ・ 生徒に問題のあったことについて聞く際には、事前に担当者間で共通理解し、連携を密にしておくことが大切だ、ということをおさえておきたい。
- ・ どの子にも、学校の楽しさや学習することのおもしろさを何かの形で知らせたいと思った。
- ・ 自信の持てること、楽しい活動、好きな場所、気の合う友達などを見つけてあげたい。
- ・ 頼りにできる、というか、なにかあった時にそばに近づける先生がいたらいいな。
- ・ 家族に対するフォローが何らかの方法でできればと思うが、難しい。
- ・ 「問題行動」と言われることに対しての対応は、その子のそれまで過ごした背景や家族の

事情など、いろいろなことが絡んでおり非常に悩む問題だと実感した。
これまで、主に授業に関する事例で行ってきたが、今回初めて生活上の問題をテーマとして取り上げてみた。このテーマでも、同じようにインシデント・プロセス法を応用して、ステップにそって進めることができた。4回目ともなり、司会者や参加者の質問も、当初より情報を得やすいものになってきた感じがする。問題場面の状況をイメージしやすくなったのではないだろうか。話し合いをしていくうちに、「自分だったらどういう対応をとるだろうか。」と本気になって悩み、そして自分のものにしていくと思う。これまでの4回ともそれぞれ違った状況、場面の中で考え、それぞれの子に寄り添っていったと思う。あらゆる角度から子供を見ようとする意識がこの方法を通して自然に浸透してきているのではないだろうか。

その⑤～平成13年度 短期研修 研究協議⑦の記録

1 ○○先生からのインシデント

小学部1年生のT君。絵の具遊びの時間に、大きな紙に自由に絵を描く遊びをした時、「嫌だ。」と言ってその場を離れ、戻ってこようとしなかった。無理に連れてきて筆を持たせようとしたら、強く抵抗した。

2 具体的にイメージできるようにするための質問と回答

学習場面	・どんな子ども。 ・いつの学習のこと。 ・教室の様子は。 ・子ども、先生の数。 ・○○先生の担当は。 ・この日の学習のねらいは。	・男の子。一語文のお話し。言ったことは少し理解できているよう。知的障害。てんかん。 ・5月。朝の会、全校体育が終わった後。10時から10時40分。 ・廊下を学習の場にした。1, 2年生の合同学習。大きな障子紙をブルーシートの上に並べた。また、ホワイトボードには模造紙を貼った。刷毛や筆、スプレーも準備していた。塗り絵の場も設定した。 ・子どもは1, 2年生22人。先生は13人。 ・T君と車いすに乗っている子どもの2人を担当。 ・22人の子どもがそれぞれに好きな方法で絵の具遊びを楽しむ。
T君について	・T君は絵を描くことを。 ・この学習の前にT君が抵抗することは予想できましたか。 ・色鉛筆や他の道具は。 ・この日の朝の会は。 ・好きなことは。 ・いやがることは。 ・休み時間は。 ・T君の生活面は。	・嫌い。絵の具の時にはいつもこうだった。 ・予想できた。しかし、初めの学習なのであえて手だてはとらず、T君の様子を見ていこうと考えた。 ・いやがっていた。 ・立ち回って、席に着こうとはしなかった。 ・トランポリンで遊ぶこと。走り回ること。 ・手先を使うことをすること。 ・バスケットボールで遊んでいる。 ・食事面は不器用だがスプーンで食べる。偏食があり、嫌いなものは「イヤ。」と言って食べない。好きなものはどんどん食べる。トイレは強い抵抗を示していた。紙パンツを利用しており、オシッコのサインはなかった。
家族のこと	・家では。 ・幼稚園の頃の様子は。 ・家族は。 ・保護者は。 ・母親は。 ・母親に関することで気になることは。	・ビデオを見て声を出したり、走り回ったりしている。 ・集団での行動は一緒にはできない。好きなタイプの子どものはいて、その子どもの後をくっついていく。 ・父親、母親、きょうだいは小6の姉が一人。父親は仕事を終えて夜、家に帰ってくる。母親はずっと家にいる。 ・母親は怒鳴ることが多い。父親は優しい。 ・たくさんしゃべったり、無口になったり変化が激しい。 ・T君が学校で衣服を汚すことを嫌う。下校時T君の服が汚れていると、そのことを担任に問うたり、T君を叱ったりすることもある。

3 問題点

- ・ 学習場面の設定に問題があったのではないかと。－1、2年生の合同学習であったこと（参加児童数22名）。場所が廊下であったこと。
- ・ 児童は学習の流れや1日の学校生活、自分と同じクラスの仲間などについて理解できているのだろうか。
- ・ 児童の実態把握が十分できていない5月の学習の在り方について、考える必要があるのではないかと。
- ・ 母親のT君に対する接し方が気になる。

4 具体案

- ・ 5月の不安定なT君には、学級の中で居場所をつくり、楽しいことを見つけてほしい。学習場面では無理強いせず、指導する側が場の設定を変更していくことが必要なこともあるであろう。まずは、T君と先生との2人の関係づくりが大事であると考え。土や砂に触れる経験をしたり、楽しい、おもしろいと感じられるところから学習を始めたい。
- ・ 母親（もちろん父親でもあるが）のことが気になる。母親への対応がうまくいけば、T君の状況も変わってくるのではないだろうか。また、5月に1年生が合同学習を行うことは難しい。場所は廊下よりもっと広い場所のほうが良いと考える。「絵の具遊び」をするのであれば、各教室でしたほうがよかった。描くことがよく分かっていない児童もいるであろうから、先生がまずは楽しく自由に遊んで動きを見せてあげるといい。
- ・ 母親の影響が大きいのではないだろうか。白いTシャツをカラフルなものに変えたり、ボディペインティングをするなど、自由で楽しい活動をT君に経験させたい。紙パンツのおむつのことも気になる。母親の思いを受け止め、父親にも協力を求めることでT君の生活面も良くなっていくであろう。入学したばかりの時期には、教師は子どもとの関係づくりだけでなく親との関係づくりも大事である。

5 授業事例

- ・ 車いすに乗った児童やバギーを使っている児童、元気に走り回るADHDと診断されている児童がおり、この時期の合同学習は難しいことであると感じながらの時間であった。T君には用具を見せながら誘いかけてみて、嫌がるときは無理をせず、さりげなく付き添った。スプレーやローラーなど別の用具も勧めてみた。担任が描く姿を見たら、少しは気分が変わるかと思ったが甘かった。
- ・ 寄り添って積み木遊びをしたり、バスケットボールで遊んだりしているうちに席にも着けるようになってきた。絵の具は相変わらず使わないし、筆も持とうとはしないが、クレヨンには手に持って線を描くようになってきている。母親については話しかけてくるときはじっくり聴くようにしている。話そうとせず表情が硬いときも、いつもと同じように接している。

6 今回学んだことと感想

- ・ 1年生5月の合同授業の難しさ。
- ・ 保護者、家庭の状況を含めた子どもの実態をつかむことの難しさ。
- ・ 学習の場を設定するときには様々なことに配慮する必要があること。（時期、時間、広さ、人数、道具、先生の動き など）

「遊び」の時間に何を求めるのか。児童一人一人を考え、場を設定したとしてもそれがうまくいくとは限らない。この事例の教師もT君ともう一人児童を担当している。実際の学校生活で、みんなが楽しく、みんなが意欲的に活動するという場を設定することの難しさを痛感した。また、T君の気になる行動には保護者の影響が大きいようだ。担任はT君との関係を深めるとともに、保護者（この場合、特に母親）との信頼関係をどうすれば築くことができるのか模索中である。教師にはこうした能力も要求されるということが分かった。

学習の一つの問題にも多くのものが絡み合っている。

(2) 成果と課題

①成果

<子どもの見方>

- ・主観的な見方だけでなく、多面的に子どもをとらえようとする新しい視点を学ぶことができた。
- ・子どもの意欲や関心に目を向けられるようになった。
- ・子どもの行動は周りの環境や大人の関わり方など、さまざまなものから影響を受けることを知った。

<授業の見方>

- ・その人の立場に立って考えることで、前向きな授業研究ができた。
- ・一人一人が自分の考えを書くことで、さまざまな対応策を具体的に学ぶことができた。
- ・授業の在り方を見直し、考えることができた。

<教師自身>

- ・自分の行ってきた授業をさまざまな面から見つめ直すことができた。
- ・教科の系統性や発達段階は、子どもを見る一つの視点としては大切だが、そこにとらわれやすいという危険性があることに気付いた。
- ・診断テストやマニュアルなどは使い方によっては、子どもの実態をゆがんだ形でとらえてしまうこともある。

②課題

- ・「インシデント・プロセス法の応用」による授業研究を地元の学校現場で生かしていくこと。
- ・系統的に学習を積み上げる視点をもちながら、子どもが豊かに生活できる力を育てる教材研究。
- ・暗記やドリル学習的なものをどう考えるか。

③心に残ったことば

研究協議を行って、私たちが得たものはたくさんある。話し合っている中ではっと気づかされることもいろいろあった。日々の授業を通して子どもに伝えたいことも、たくさん出てきた。そうしたものを「ことば」にして、まとめてみることにした。

「子どもは楽しくやっている、と決めつけていることがあったかも。」

「言葉にしたことは、文字に表せるんだ!」「文字に表すと伝わるんだ!」

「あなたがいるおかげで助かるよ。」(という思いを子どもに伝えたい。)

「子どもと約束したことは守ろう。」(信頼しあえる関係)

「先生は助けすぎている。自分で考える経験がもっとあってもよい。」

「数ができないと生きていけない、では悲しい。」

「自信を持っていいよ、と認めてくれる先生がいたら」学校に来る喜びができるかな。

「何をどうやって教えるか、より先に、その子にとってそれを知ること、学ぶことの意味は何なのかをしっかりとつかむことが大事。」

「学ぶことが本当の子どもの喜びになっているか。」

「それって教師の自己満足?」・・・それができるようになることを本当に子どもが望んでいるのか。

「自分だったらどんな授業をするだろう、と、本気になって考えている自分がいた。」

「その子はもしかしたら(もっと奥底にあるような)ほかのことではつまずいていたのではないか。」と考えるようになった。

「子どもの行動には必ず意味がある。」「どこから何を見るか。」

「求められている教育内容と、子どもがやりたがっていることとをうまく結びつけるのは難しい。」

「悩んでいるみんな、一緒に考えようよ!」